

Innovation Times

# SDGs 横浜の挑戦

Vol.18

企画・制作=神奈川新聞社 企画推進室



## グローバルから 広げよう 幸せの経済

「いつしたら、世界をもっと幸せな場所にするのか」を共に考える「しあわせの経済 国際フォーラム2019」が9、10の両日、横浜市戸塚区の明治学院大学横浜キャンパスで開かれた。国内外の研究者や文化人、市民団体、学生、市民ら約1700人が参加。環境から食、文化まで幅広いテーマで報告や議論を行ったほか、マルシェに映画祭に、と多彩なプログラムでにぎわった。(波多野 寿生)

### 明学大で国際フォーラム

日本では3回目の開催で「リセッション」をキーワードに「グローバル化からの転換で経済を自分たちの手に取り戻そう」と「一人・地域・自然のつながりを再生させる」をテーマに、国際フォーラムを開催した。初日のシンポジウムでは「しあわせの経済」を世界各地で開催するローカルイノベーションのリーダー、ヘレン・ノバーク・ホジソン氏が基調講演を行い、個別でもこの見方一つ一つ解決することとはできないとして、「ピクニック」(世界観、大局観)を理解する重要性を強調。多くの問題を抱えるグローバル経済の下、競争するシステムでは互いが敵となり、世界中で不安感がまん延している現状に警鐘を鳴らした。さらに「私たちは自然の一部であり、人間や自然界とながら活動を行うことが大切。草の根の人たちの活動に



分科会から 明治学院大学国際学部付属研究所の特別企画で、大勢の参加者が登壇者の話に聞き入った

### 分科会から

分科会では大勢の参加者で各会場とも盛り上がりを見せたが、その一つが「しあわせ×あいだ×ローカル」。明治学院大学国際学部付属研究所の特別企画で、出演者の示唆に富んだ軽妙なトークが展開された。聴衆を魅了した「知見」の一部を紹介する。進行役は同研究所所長の辻信一さん。法政大学総長で江戸研究者の田中優子さんと社会福祉士でコミュニティデザイナーの山崎亮さん、同研究所前所長で作家の高橋源一郎さんを迎え、「あいだ」の持つ意味や可能性を探った。高橋さんは「現在は賛成か反対かなど二項対立が厳しくなっている時代」と指摘。そこでは中間が排除されているが、中間こそ「豊かな可能性を秘めている」余地(時間や空間)だと見る。さらにニュートンから憲法まで多様な事例を引き合いに出しながら「難攻不落に見える固いシステムに対し、個人が入る」隙間。(余地

### 「あいだ」の重要性 多彩な知見で指摘

を見つけていくしかない」と語った。田中さんは、江戸時代に武士や浮世絵師らが才能ごとにいくつもの名前を使い分けて活動した様子をユーモラスに紹介。「一人の人間が自分の才能を分け、それぞれネットワークを広げていく中で成立したのが江戸文化」と解説し、「自分の中で、違う自分たちとの間を彼らがどう感じていたのか、日々想像しながら研究している」と話した。「建築でも曖昧さを排除する方向で動いている」と話す山崎さんは、コミュニティデザイナーとして「対話の場をつくることで、人と人との間に新たな価値を生み出す。それを手伝うのが私の仕事」と説明。さらに雑談の効用を説き、「行政は時間の無駄というが、これがないと人と人との間に良い関係が生まれず、つながらない」と話した。辻さんは「世界を支配する経済を見直そうという、幸せの経済のムーブメントが世界中で起きている」と現状を説明。各氏の話を受けて「現代が抱えている根本的な問題は『分離』だと思う。人と自然、人と人…。それらの『あいだ』が失われている」と感想を述べた。(波多野 寿生)

慶応大学(三田)で先日開かれたSDGs×幸福×経営シンポジウム。「幸福研究第一人者である前野隆司同大学教授による基調講演は興味深く、印象的な言葉がいくつもあった。私に審査に加わった感想文コンドールの推薦図書「グロンドック」(今西乃子著、金の星社)の中にこんなくだりを見つけた。「幸せって、分けたら減るもんじゃなく、増えるもんなんだよ。言うなれば、幸せのお裾分けの精神だ。『競争社会にあっても、利他的な境地にはなれない』と言っている場合ではない。SDGsの目標をかなえるために、互いに助け合い、力を合わせていこう。『SDGs横浜の挑戦』(編纂 春名 義弘)



### 利他的境地で 幸せお裾分け

「会社の経営で一番大事なのは社員の幸せ」「幸せな社員は創造性も生産性も高い」「幸せに気を付けていると幸せになる」「感謝する心が大切」など。発事故以後のエコジョーと地域「森林農法と地域経済」地域自立・循環型エネルギーと解を深め合った。ローカルイノベーション」など、幅広いテーマで参加者と理解を深め合った。

## 環境意識高まり 「出前講師」人気

浜なし飲料ポスター、ペットボトル分別…

### 資源リサイクル 事業協同組合

横浜市資源リサイクル事業協同組合(神奈川区)の「出前講師」事業が、環境意識の高まりから引張りだ。学校や自治会・町内会などから週1回以上のペースで派遣要請がある。テーマは本来のゴミ分別から、プラごみ、食品ロス、SDGsへと広がりをみせている。出前講師が始まったのは2001年。小学校でリサイクルについての学習が深まるにつれ、問い合わせが増加。教室に向いて話をせる機会に繋がった。一方、自治会・町内会では、分別の必要性を住民に理解してもらう必要があった。講師は同組合企画委員と一般組合員。11月20日現在で、派遣回数は6255回に達する。派遣先は自治会・町内会45%、小学校33%、中学校6%など。学校向けでは数回かけて社会課題の解決を導き出す授業も展開している。



SDGsについて学んだ山下みどり台小児童(左)出前講師として市場小で授業をする組合スタッフ(右は提供写真)

緑区の市立山下みどり台小学校で10、11月に行っているのは、浜なし特別出前授業。同組合は横浜リユースびんプロジェクトで、浜なしを使っただけの飲料を回収し、産地に回収される33%はキャップとラベルが取れないという実態から、解決策を考え、16日の学校開放日に研究成果の発表などが行われた。児童らは「家庭ではキャップとラベルを外すのに、なぜ自販機のリサイクルボックスに入れるときは外さないのか」という疑問にたどり着い

た。これをきっかけに学習を深めたクラス全員が「清潔飲料自販機アイデアコンテスト」に応募し、2人が佳作に選ばれたという。同組合では「課題を知ったからには、児童らに、社会のチェンジメーカーになってほしい」と話していた。(春名 義弘)

### SDGs推進へ 生徒が提案発表

星槎グループ

アジア、アフリカとの交流イベント「SEISSA Africa Asia Bridge(SAAB)2019」が9、10の両日、旭区の星槎中学・高校で開かれ、約800人が参加した。星槎グループと世界でも財団、国際学園が主催し、今年で5回目。「SAAB×SDGs」では、全国の星槎グループの生徒会が5組に分かれ、取り組みを発表し、短い言葉、イラスト、鮮やかな色で示されているので、達成するための具体的な行動を自分なりに発想できる」と話していた。(阪本 光章)

《次回は12月11日掲載予定》